

かみ さむらい づか こ ぶん  
上侍塚古墳

おおたわら ゆづかみ  
栃木県大田原市湯津上地内

現地説明会資料 令和3年12月11日(土)  
栃木県教育委員会事務局 文化財課  
宇都宮市塙田 1-1-20 TEL 028-623-3425  
公益財団法人とちぎ未来づくり財団  
埋蔵文化財センター  
下野市紫 474 TEL 0285-44-8441  
<http://www.maibun.or.jp>

公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターでは、県内にある重要な遺跡の調査研究とその活用を目指した「いにしえのとちぎ発見どき土器わく湧くプロジェクト」事業として、栃木県の委託を受けて、侍塚古墳（上侍塚古墳・下侍塚古墳）の発掘調査を行っています。初年度となる令和3年度は、侍塚古墳と周辺の航空レーザ測量を実施したほか、上侍塚古墳の墳丘の周囲にトレンチ（試掘坑）を設定して調査を進めています。調査はまだ始まったばかりですが、これまでに得られた成果をご紹介します。

### 1 侍塚古墳（上侍塚古墳・下侍塚古墳）

侍塚古墳は、上侍塚古墳と下侍塚古墳という2基の古墳の総称です。那珂川の西側段丘上に南北に約800mの距離を置いて並んでいて、南が上侍塚古墳、北が下侍塚古墳です。ともに古墳時代前期の前方後方墳で葺石を持ち、規模は上侍塚古墳が那須地域最大、下侍塚古墳は2番目の大きさです。江戸時代の元禄5（1692）年に徳川光圀が発掘をした古墳としても知られていて、両古墳は昭和26（1951）年に国史跡に指定されています。

下侍塚古墳は昭和50（1975）年に周辺の圃場整備に伴って周溝部分が調査され、築造当時の土器が出土しました。一方、上侍塚古墳は光圀の発掘以来手つかずのままで、地域最大の古墳にもかかわらず、正確な築造時期や規模などはわかっていません。

#### ■ 上侍塚古墳

総長 不明 墳長 114m  
後方部幅 58m 後方部高さ 11.5m

#### ■ 下侍塚古墳

総長 108m 墳長 84m  
後方部幅 47m 後方部高さ 9.3m  
前方部幅 34m 前方部高さ 5.6m

上侍塚の北には、上侍塚・下侍塚より古い可能性が指摘される全長48.5mの前方後方墳、上侍塚北古墳があり、下侍塚の北には一辺17mの方墳とされる侍塚古墳群八号墳をはじめ8基の古墳からなる侍塚古墳群があります。



侍塚古墳周辺の航空レーザ測量図





#### 4 徳川<sup>みつくに</sup>光圀の侍塚古墳発掘

侍塚古墳(上侍塚古墳・下侍塚古墳)は、今から約330年前、江戸時代の元禄5(1692)年に水戸黄門の名で知られる徳川光圀が発掘調査を行った古墳です。光圀は小口村(現那珂川町小口)の庄屋、大金重貞から献上された『那須記』に書かれた「那須国造碑」に注目し、碑に記された人物の氏名を明らかにするため碑周辺と侍塚古墳の発掘を行ったのです。

発掘にあたったのは光圀の命を受けた儒学者の佐々介三郎宗淳と大金重貞で、その時の状況は大金重貞が書いた『湯津神村車塚御修理』から知ることができます。

それによると、五尺(1.5m)ほど掘り下げると「へな土」があり、その付近から振文鏡1面、石釧1点、管玉2点、鉄鍬18点、鉄斧1点、甲冑片5点などが出土、これらの品々は絵師が図をとったあとで箱に納め、その箱を八尺(2.4m)下に埋めたとあります。出土品を入れた箱は松の板で作った長さ一尺(30cm)、幅七寸(21cm)、高さ七寸(21cm)のもので、釘でとめて松ヤニで目張りをし、蓋には光圀によって発掘の経緯を明らかにした書き付けがあったとされています。



『湯津神村車塚御修理』p17-p19 上侍塚古墳の出土品

これを実際の古墳に当てはめると、発掘地点は後方部の墳頂で、「へな土」が粘土だとすると埋葬施設は木棺を粘土で覆う粘土槨か、棺の下に粘土を敷く粘土床のような構造だったと思われます。後方部中央の地表面下1.5mの位置に古墳の被葬者が埋められていて、そこに副葬品としての鏡などがあったのでしょう。

発掘の後、墳丘には新たに土を盛り、松を植えて土が崩れないようにしました。古墳の中に埋めた箱の書き付けには「墓誌が見つかって被葬者の氏名がわかれば、記念碑を建てて後の世まで伝えようと思った」という意味の言葉があります。光圀は古墳の被葬者に対して敬意を払うとともに、この古墳が長く後世まであり続けられるようにと考えていたのでしょう。こうした考え方は、現代の文化財保護の思想と比較しても遜色ないものであり、「日本最初の発掘調査」、「日本考古学発祥の地」とされるゆえんでもあります。

今、侍塚古墳(上侍塚古墳・下侍塚古墳)は日本一美しい古墳と言われることがあります。古墳時代に築造された当時の姿もすばらしかったと思われませんが、それに光圀が行った偉業が加わったからこそ現在の優美な姿になっているのです。